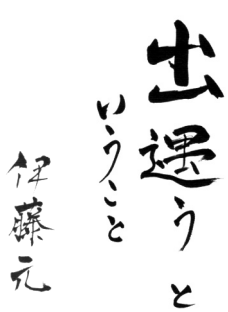
御遠忌テーマ

親鸞さま、なぜ、お念仏なの？

― 出会おう、語ろう、今ここで！―



宗祖の問い

伊藤　元　先生

北九州市
徳蓮寺前住職

2019年3月9日

如是我聞

浄土真宗の所依の経典は浄土三部経です。それは『仏説無量寿経』『仏説観無量寿経』『仏説阿弥陀経』です。先ず『仏説……』という言葉が頭についています。それは釈尊が説かれたということです。経文の書き出しは「我聞如是（がもんにょぜ）」もしくは「如是我聞（にょぜがもん）」です。説いたのはお釈迦さまなんだけど、書かれているのは聞いた人の内容なんです。ここは注目すべきことと思います。

「如是我聞 ― 私はこのように聞きました ―」ということは、信じられた、ということです。踏み込んで言えば、自分の人生が一回転するような言葉に出会いました、ということです。

ヤスパースというドイツの哲学者が「真理は二人から始まる」という言葉を残しております。どんなに素晴らしい真理を説いたとしても、それを聞いて肯く人が生まれなければ真理にならないということです。つまり、人間の歴史にならんような教えは本物ではない、ということでしょう。

師と出遇う

お釈迦さまの従兄弟で、いつもお釈迦さまの身近にいた「多聞第一」の阿難が、お釈迦さまに、「世尊よ、善き友のあること、善き仲間のいること、善き人々に囲まれていることは、仏道修行の半分が達成されたことですね」と聞いたところ、お釈迦さまは、「阿難よ、そうではない。善き友をもつこと、善き仲間のいること、善き人々に取り巻かれていることは、仏道修行の全てである」（『サンユッタ・ニカーヤ』）と答えられたという話があります。

親鸞聖人も同じですね。聖人は29歳の時、本願念仏の教えに生きておられる法然上人に出遇（であ）われた。その時、聞いた言葉が「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」です。この言葉を聞いたことで、親鸞聖人のご一生が百八十度変わったんです。

梶山雄一という仏教学者が言っておられましたが、「人間には、一度か二度しか聞いていないのに、折に触れてよみがえってくる言葉がある。そういう言葉を一つか二つ聞いて死んでいくような人生だったら、それは最高の人生と思う」と。

親鸞聖人も関東から尋ねてきたお弟子さんに、50年も前、法然上人に出遇った時のその感激を「親鸞におきては、ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとのおおせをかぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり」とおっしゃられた。「私において」ではありません。誰とも比べることのできぬ「この親鸞におきては」です。「罪業（ざいごう）深く、様々な問題抱えているこのわが身においては」ということですね。

浄土真宗という仏道は師友に巡り会うことから始まるんです。人を通して教えは伝わっていくんですから。人に出遇うことが、とても大切なことになります。

迦羅求羅虫（からくらちゅう）

『蓮如上人御一代記聞書（れんにょしょうにんごいちだいきききがき）』の150に『徒然草』を引用した「その人を知らんとおもわば、その友をみよ」という言葉が出てきます。人は、出遇った人によって内にあるものが引き出されるんでしょう。

曇鸞（どんらん）さんの書かれた『浄土論註』に迦羅求羅虫という虫の譬えがありましてね、その虫は、普段は目にも見えないくらい小さい虫なのに、身に大きな風を受ければたちまちに小山ほどにもなる、というのです。教えていることは、存在の大きさは、その人のもっている大きさではなくって、出遇ったものの大きさによる、というのです。

昨年、山口県の大島で2歳の子が行方不明になった時、警察や消防団が大勢で探しても見つからなかったのに、日出町出身の尾畠春夫さんという方がたった一人で見つけ出しましたね。それで時の人になったわけですが、なんでも尾畠さんは一年の

大半を世のために尽くそうとボランティアをしているという。はじめは本当かいなと思ったけど、聞いてみれば嘘とは思えません。尾畠さんに煩悩やエゴイズムがないということは、ないはず。どうしてあんなことをなさっているのか。多分、出会ったものが動かしているんでしょうね。煩悩しかないけれど、煩悩を超えるような願いをもつことになったんじゃないでしょうかね。

遇うべくして、遇う

「であう」ということを言ってきましたが、「あう」には「遇、会、値、逢」などたくさんの漢字があるけれど、浄土真宗では「遇」を使う場合が多いですね。「遇」を訓で読むと「たまたま」です。つまり「出遇い」というのは「たまたま」「偶然」なんです。しかしそれは、法から言えば「必然」なんです。遇うべくして、遇ったんです。求めていないものには出遇わないでしょう。意識の奥にあるものも含めて、もっている問いに応じたものが出遇いです。安田理深先生は「こちらのもっている問いの深さに応じて真理があらわれる」とよく言われました。

問いを学び、感覚を育てる

どういう問いをもって生きるかによって出遇いが決まる。私たちが仏法を学ぶということは、もつべき問いを教えてもらう、私たちの考えではもてなかった関心を教えてもらう、そうじゃないでしょうか。それはそのまま、出遇いのための準備でしょう。

それから、『蓮如上人御一代記聞書』の57に「ひとたび、仏法をたしなみそうろうひとは、大様になれども、おどろきやすきなり」という言葉があります。少しでも仏法に触れるような暮らしをする人は、ぼーっとするような身になったとしても、はっと気がつきやすい、と。

つまり、仏法を学ぶということには、問いを学ぶということと、ものを感じていく感覚が育てられるということがあるんですね。気がつくか、気がつかんか、それが人生を分けるんでしょうね。

限りなき途中なる道

仏教を聞くことで、私の考えではわからなかったことが多かった、自分は不完全である、ということを教えてもらうんでしょう。何でもわかっていると思って生きている人ほど想像力を失っていきます。自分が不完全だということに頷けば頷くほど、感覚は鋭くなる。問いが大きくなる。決して仏法は、不完全な自分が完全になる道ではない。いかに、凡夫である自分をいただけるか、です。

死ぬまで育ててもらわな、ならん。死ぬまで聞いていく。すごく新鮮でありませんか。浄土真宗の教えというのは、限りなく途中なる道なんです。これだけ知ったらいいんじゃない、知れば知るほど求めていく心が生まれてくるのでしょう。

問いをもって生きる

何回も申しますが、煩悩はなくなるわけじゃない。「仏法聞いたら、腹も立たんようになった、欲もでんようになった」なんて、そんな人間、面白くないと思います。腹立ったことを通して、恥ずかしさを知れるじゃないですか。教えにあえるじゃないですか。

この世間は人間関係でできてますから、いろんなことで辛い思いをするわけです。そういうことを思いますと、教えに遇わなきゃならん必然性があるね。相手の問題より、こちらの根性が問題ですね。

仏法を聞くということは、言うことを聞かぬ家族が思い通りになることではない。言うことを聞かん家族の中にあって、どうすれば心を通じ合えるか。うまく行かない世にあって、どうしたら豊かな心で生きることができるか。こういう問いをもって生きることです。そうすると、日々の暮らしは広がってゆきますよ。

超え出る

高浜虚子に「敵というもの今はなし秋の月」という句があります。「今はなし」ということは、かってあったのでしょう。敵がいなくなったということは、世界が広がったということでしょう。秋の月ということは人生の晩年を意味します。間に合ったという、ひとつの深い慶びでしょうね。

私たちが仏法を聞くということは、心を開くということですね。念仏申すということは、苦楽・損得・善悪・浄穢を超えた世界に連れ出されることです。真実の宗教はこちらが変えられることです。私が育てられるのです。恨む人がいなくなったこと程、幸せはありませんよ。どうでしょうか。

聞き書き担当者・感想

お歳を感じさせない、伊藤先生のユーモアを交えた軽やかなご法話でした。テープ起こしを通して、尊い教えの満載された内容だったことを、あらためて感じさせていただきました。

私も20年ほど前、林暁宇先生を勝福寺にお尋ねしたことがご縁となって、その後、勿体ないほどの法縁の中で善き師、善き友を賜り、今があります。

今後、「自己の虚妄の相を知る」を課題として、聞法生活を続けたいと思います。

南無阿弥陀仏　釋尼麗空

第15回（5月11日）
「心理から真理へ」
百々海　真先生
（東京都・了善寺住職）